

中国の農村教育者・晏陽初

—その事跡と資料—

鎌田文彦

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに 2. 晏陽初の歩み 3. 晏陽初研究の概観 <ol style="list-style-type: none"> (1) 中国 (2) 米国 (3) 日本 | <ol style="list-style-type: none"> 4. 晏陽初に関する主な資料 <ol style="list-style-type: none"> (1) パール・バックと晏陽初 (2) 郷村工作討論会 (3) 雑誌『民間』 5. おわりに |
|---|---|

1. はじめに

国連は、1990年を「国際識字年」(International Literacy Year)と定めた。この「国際識字年」は、ユネスコ(国連教育科学文化機関)が提唱したものであり、関連する諸活動もユネスコが主導的な役割を果たしている。

ユネスコによる1989年の統計によれば、読み書きのできない人々(非識字者)は、世界で9億6000万人にのぼる。このうち6億6600万人は、アジア地域に存在している。全世界の人口の約4分の1が非識字者ということになる。しかし、この数字でさえ実態を表してはならず、事態はもっと深刻だとの見方もある。

(読売新聞社編『識字—すべての人々に文字を』明石書店 1990 <FB4-E4>より)

何人からも奪うことの許されない権利として承認されているはずの教育を受ける権利が、事実上人類の4分の1あるいはそれ以上の人々から奪われており、これが非識字者の自己改善と貧困からの脱却を困難にしていることが、あらためて世界的な大問題として認識されつつあ

る。識字問題の解決は、第三世界の発展にとって避けて通ることができない重要課題なのである。

地球上における南北問題の存在が指摘されてから久しい。「南」の世界の貧困の解決、経済発展、開発が論議され、様々な試みがなされてきた。しかし、最近になって、そのような問題の根底に横たわる、一般の人々の教育からの疎外、その端的な現象としての非識字にまで問題が深くとらえられるようになり、その解決が模索されている。



晏陽初という人物がいる。70年前に、すでに中国における文字を知らない民衆の苦痛を思い、中国各地で識字運動を展開した。その後、本格的な農民教育活動に従事することになる。しかも、これは中国だけの歴史上の出来事ではない。第

二次世界大戦後、その活動は中国を飛び越えて全世界的規模となり、現在のユネスコの運動に連なる。

この晏陽初が提起した問題の深さ、活動範囲の広さにも関わらず、彼の名前は、一般的にはほとんど知られていない。最近の国連の活動を数十年前から先取りしていたかに見えるこの先駆者に対して、もう少し関心を寄せてもよいのではないだろうか。

本稿は、国立国会図書館の所蔵する関係資料を紹介しつつ、この晏陽初なる人物についての初歩的な探求を試みるものである。

2. 晏陽初の歩み

晏陽初は、1893年、四川省巴中県に生まれた。幼時には伝統的儒教教育を受け、10歳前後から外国人宣教師のもとで西欧的教育を受ける。その後奨学金を得て香港に学び、更に米国エール大学に留学するという、清末民初知識人のエリート・コースを歩んだ。

1918年、エール大学卒業と同時に、YMCAの要請に応じて、晏はフランスに渡り、在仏中国人労働者の基礎教育に従事する。第一次世界大戦中、20万人にのぼる中国人労働者が、英仏政府によって徴募され、英仏軍の後方で道路建設、食糧運搬、塹壕掘りなどに従事していた。YMCAは、これら労働者に対する福祉活動を展開しており、晏はその一員として、中国人労働者の手紙の代筆などを行った。しかし、晏はそれに止まらず、より積極的に自ら識字クラスを設け、中国人労働者に対する識字教育を始めた。中国人労働者の熱心さに打たれた晏は、識

字教育を充実させるためにテキストを編集し、また『駐仏華工週報』を創刊した。こうしたフランスにおける活動が、その後の晏の進む方向を決めることになる。

晏は、この当時の心境について、後に次のように述べている。「平教運動の発端は、ヨーロッパ戦争の時です。当時各国はヨーロッパに行き仕事をする中国人労働者を募集していました。私は、アメリカからフランスに渡り、中国人労働者の教育に従事し、中国人労働者の文字を知らないことの痛苦を目の当たりにする経験を得ました。同時に、国内の一般的な文盲の状況が、国家民族の前途に重大な関係を持っていることに思い至り、そこで帰国後ただちに識字運動に従事したのです。」(後掲『郷村建設実験』第1集、p.53-54より)

晏は、1920年に帰国すると、中国YMCAに平民教育部を設け、自ら責任者となり、中国本土での教育活動を開始する。1920年冬から22年春までの1年あまり、各地の平民教育運動を視察し、またその間に、識字教育用テキスト『平民千字課』を編集する。最初の実践の場所を湖南省長沙と定め、YMCA組織を活用して宣伝に努め、1922年3月から7月にかけて、最初の識字教育活動を実施した。60か所あまりの平民学校を設け、教師約80人が、1,300人の学生に識字教育を行った。7月の卒業試験には1,200人が参加し、そのうち967人が合格して「識字教育証書」を得た。それ以後も長沙では運動が続き、また山東省煙台、浙江省嘉興、杭州などでも続々と同様の運動が展開された。

1923年8月には、熊希齡夫人朱其慧の提唱により、中華平民教育促進会(以下

「平教会」と略称)が結成され、朱其慧が理事長、晏が総幹事に就任した。以後平教会は、全国の識字運動を指導することになり、晏は1924年夏以降、YMCAを離れて、平教会の活動に専念するようになる。

平教会が指導する都市部での識字運動は、一時大発展を見たが、単発的なものに終わってしまい、なかなか定着しないという問題をかかえていた。また、晏らは、都市部よりもより教育から疎外された農村部で教育活動を展開することの必要性を感じるようになった。そこで、1926年11月以降、河北省定県の翟城村など62村を「華北実験区」とし、調査活動を開始した。また、晏は、1928年秋、米国に渡り、各地で平民教育運動について講演し、多くの支持を得て、50万ドルの寄付金を集めることに成功した。また「中米合作委員会」を設け、米国で募った寄付金を平教会に送ることが決定された。このような財政基盤を得て、平教会はより効果的な教育運動の展開を目指して、1929年秋、活動を定県に集中する。

晏は、農村に着目した動機について、次のように述べている。「運動の経験を通して、中国の大部分の文盲は都市ではなく農村にいて、中国は農業により成り立っている国であること、中国の大多数の人々は農民であり、農村は中国の85パーセント以上の人民の帰結地であることなどから、中国に平民教育を普及させようと思えば、農村の中へ行かなければならないということを確信するに至りました。そこで私達は、定県に行って活動することを決定したのです。」(同上、p.54より)

晏は、「4つの問題」「4つの教育」「4

つの建設」という構想のもとに、「定県実験」を進めた。すなわち、当時の中国農民のかかえる問題を愚、窮、弱、私という4つの欠点としてとらえ、その4つの問題に対応して文芸教育、生計教育、衛生教育、公民教育を実施し、教育を基礎として、文化建設、経済建設、衛生建設、政治建設をはかるという構想である。

具体的には、文芸教育の面では、識字用テキストの編集・出版、識字教育を行う平民学校の設立とその指導、巡回文庫の実施、演劇活動の指導などを行った。生計教育の分野では、生計巡回訓練学校による農民教育、動植物の新品種導入、信用合作社、綿花運送合作社などの合作社の設立指導を行った。また、衛生教育面では、保健院・保健所の設立による医療・衛生活動、種痘などの予防活動を行った。公民教育の面では、1933年以降、定県の県政改革に携わり、公民訓練を実施し、県民の組織化をはかった。

しかし、1930年代に入って中国をおそった農村恐慌により、平教会の経済面での活動は、大きな障害にぶつかった。また、日本軍の華北に対する圧力により、定県実験は中断を余儀なくされる。

1936年以降、晏は、湖南省、四川省でも活動を開始し、1936年7月の湖南省衡山実験県の設立を指導する。以後、平教会は徐々に活動の重点を、定県から衡山県に移して行く。日中戦争が勃発して定県が日本軍に占領される頃には、平教会の活動は完全に南に移行していた。

湖南省では、湖南地方行政幹部学校の指導なども行っていたが、1942年に長沙が日本軍に占領されると、晏らは四川省に移り、郷村建設学院を創設すると共に、行政幹部訓練学校で、官吏の教育に従事

する。

内戦期には、米中間に「農村復興連合委員会」を設立し、晏はその委員に就任し、米国の対華援助をもとに、四川省などで社会教育運動を行う。中華人民共和国成立後は、米国に渡り、1951年に「国際平民教育運動促進委員会」を設立し、アジア各国の農村調査を開始した。

1952年からは、フィリピンで活動を始め、同年7月に、「フィリピン郷村改造運動促進会」を設立し、定県実験の際の「4つの教育」「4つの建設」の構想を、フィリピン農村に適用しようとする。以後、晏は主としてフィリピンを舞台に活動し、1967年には、マニラ郊外に「国際郷村改造学院」を設立し、農村教育、農村建設の指導者育成をはかる。

以上のように、晏は農民教育に生涯をかけて取組み、長寿を全うして1989年1月に世を去った。

* * *

「国際郷村改造学院」(International Institute of Rural Reconstruction) は、フィリピンで農村教育、農村建設の実践を行うとともに、世界各国から訓練生を受入れ、農村指導者の育成を図っている。また、コロンビア、タイ、インドなどの国々の郷村改造組織のバックアップを行っている。晏が作りあげた国際郷村改造学院は、近年注目を集めている NGO(非政府組織)の一員として、世界に確固たる位置を占めるに至っている。

晏は、中国共産党の路線とは異なった道を歩んだために、中国ではほとんど注目されることがなかったが、その中国でも最近になって、晏に対する再評価がなされている。そして、1988年以降、中国は毎年国際郷村改造学院に訓練生を派遣

し、農村指導者の育成を依託している。

晏は、創設後のユネスコに、「基本教育計画」主任として参加するよう要請されたことがある。結局その要請は断ったものの、その後も晏の思想と活動はユネスコに大きな影響を与えている。晏は、民衆の教育に着目する近年の世界的潮流を作り上げる一つの原動力となった。ここに、忘れられていた思想家・実践家晏陽初を研究する現代的意義が見出だされられると思われる。

3. 晏陽初研究の概観

以上のような生涯を送った晏陽初について、従来どのような研究が行われて来たのだろうか。以下、中国、米国、日本の研究状況を、文献を紹介しつつまとめてみたい。なお、国立国会図書館所蔵の資料については、その請求記号を〈 〉内に付した。

(1) 中国

晏は、中国共産党の指導した農村革命の路線とは異なる道を歩んだために、中華人民共和国成立後は、その思想と行動が厳しく批判された時期があった。例えば「封建買弁階級のペテン」といった政治的な評価で片付けられ、そもそも研究の対象にもされないという時期が長く続いたのである。

しかし、このような状況は数年前から変化し、事実に基づき晏陽初の思想と行動を研究しようとする機運が生まれ、次のような成果が現れ始めている。

なお、1920年代から40年代にかけて晏が中国で活躍した時期の資料については、晏の著作も含めて多数残されている。

それら原資料の網羅的な紹介は本稿では割愛するが、代表的な資料については4節で紹介することとしたい。

- *『晏陽初教育思想研究』 長沙 湖南教育出版社 1988
- *宋恩栄主編『晏陽初全集』 第1巻 長沙 湖南教育出版社 1989
- *宋恩栄編『晏陽初文集』 北京 教育科学出版社 1989
- *詹一之編『晏陽初文集』 成都 四川教育出版社 1990
- *『晏陽初教育思想研究』 第2集 長沙 湖南教育出版社 1990
- *李濟東主編『晏陽初与定県平民教育』 石家荘 河北教育出版社 1990
- *宋恩栄主編『教育与社会発展 晏陽初思想国際学術研討会論文集』 長沙 湖南教育出版社 1991

なお、台湾で発行された次の作品は、晏へのインタビューと膨大な資料に基づいて書かれた最初にして最も詳細な晏陽初の伝記である。

- *呉相湘『晏陽初伝一為全球鄉村改造奮闘六十年』 台北 時報文化出版社 1981

(2) 米 国

Mayfield は、主としてフィリピンにおける晏陽初と国際鄉村改造学院の活動を分析している。また、Hayford は、長年にわたる晏陽初研究の成果をまとめて、詳細な伝記を発表した。

- * Mayfield, James B., *Go to the people: Releasing the Rural Poor through the People's School System.* West Hart-

ford: Kumarian Press, 1985.

- * Hayford, Charles W., *To the People: James Yen and Village China.* New York: Columbia University Press, 1990.

(3) 日 本

戦前においては、晏陽初の活動は、中国における新しい運動として日本人も関心を持ったようで、晏の運動を紹介する文章が若干発表されている。

- *小倉隆「農村実験区の概況」『満蒙』16巻5号 1935年3月 <Z051.3-M6>
- *武田熙「支那『郷村建設運動』の実際—中国民族自救の最後のと自信する」『新天地』15巻11~12号 1935年11~12月 <Z051.3-Si32>
- *張純明「支那農村に於ける新政治—農村建設の政治的側面」方顯廷他著 日本国際協会太平洋問題調査部訳『支那経済建設の全貌』日本国際協会 1937 <739-118>
- *範郁文著、山本純訳「支那郷村建設運動の新動態」『満鉄調査月報』17巻11号 1937年11月 <Z8-1595>
- *工藤篁「平教実験区『定県』」『一橋論叢』7巻6号 1941年6月 <マイクロ資料 YA5-30>
- *大久保荘太郎「近代支那の平民教育運動—『定県河北実験区』を中心として」『東亜人文學報』2巻3号 1942年12月 <雑55-40>

戦後においては、上述のような中国の研究状況の影響と思われるが、晏陽初はほとんど注目されることなく、関連する論文は少ない。しかし、同時期の中国の

教育者・陶行知との比較の観点などから論文が発表されるようになってきた。いずれにしても、本格的な研究はこれからということになる。

- * 上原淳道「郷村建設運動」野原四郎他編『講座近代アジア思想史』中国篇[1] 弘文堂 1960 <081.6-Ko696-N>
- * 梅原弘光「フィリピンにおける非政府系協同組合の組織と実態—とくにPRRM推進の協同組合を中心として」アジア農業協同組織研究会『アジア農業協同組織研究会報告(昭和44年度)』アジア経済研究所 1970
- * 加々美光行「中国郷村建設運動の本質—30年代国民党官僚資本下における」『アジア経済』11巻1号 1970年1月 <Z3-65>
- * 滝川勉「フィリピン農業問題の展開」滝川勉編『東南アジアの農業農民問題』亜紀書房 1971 <DM53-8>
- * 斎藤秋男「中国革命と『実験区』計画—晏陽初 Y.C. James Yen という人物・再論」『社会科学年報』(専修大学社会科学研究所)第9号 未来社 1975 <Z6-283>
- * 新保教子「『解放』前中国における郷村教育運動—中華平民教育促進会をめぐって」『東京大学教育学部紀要』第24巻 1984 <Z7-315>
- * 斎藤秋男「陶行知・晏陽初と平民教育運動」『東亜』1984年4月 <Z24-65>
- * 斎藤秋男「陶行知・晏陽初と教育運動の曲折—アメリカ留学帰国者の社会活動」阿倍洋編『米中教育交流の軌跡—国際文化協力の歴史的教訓』霞山会 1985 <FB82-49>

* 小林善文『平民教育運動小史』京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第3函10 同朋社 1985 <GE326-90>

4. 晏陽初に関する主な資料

国立国会図書館は、晏陽初研究の基本となる資料を所蔵している。以下、そのうちの3点について紹介してみたい。

(1) パール・バックと晏陽初

晏陽初とほぼ同年輩で、生後間もなく中国にわたり、長く中国で生活したパール・バックは、中国在住当時から晏の活動に注目していた。1945年に米国を訪れた晏に対して、バックは2日間に渡りインタビューを行い、晏の思想と活動、その人となりを紹介している。それが、次の資料である。

* Buck, S. Pearl, *Tell the People: Talks with James Yen about the Mass Education Movement*. New York: The John Day Company, 1945. <370.951-B922t>

バックは、晏の定県における活動を伝え聞き関心を持っていた。たまたま社会統計の専門家である彼女の兄弟が、実際に定県を訪ねて、そこで数々の農村建設の新たな試みが行われているのを目にし、それを彼女に伝えたため、バックはますます晏の活動に興味を持ち、定県訪問を希望していた。しかし、1935年に米国に帰ったためその希望は適えられなかった。そして、1945年になって、やっとじっくりと晏と話をする機会を得たので

ある。

バックは、晏に対する共感を次のように表現している。「我々は、異なった道を通りながらも、同じ結論に達していた。すなわち、どこの国であれ普通の人々 (common man)こそ最も大切な人々であり、彼らにふさわしい運命が開けないならば、この世界には平和も喜びもないということである。我々は二人とも、この普通の人々を深く尊敬しており、彼らのために献身する深い決意を有していた。」(p.10)

2日間に渡り、晏は熱心に自らの信条とこれまでの活動を語り続けた。バックは、そのような晏の印象を次のように述べている。「5分も一緒にいれば、誰でもこの人はもはや永遠に自分自身のことは忘れ去ってしまったのだということに気付くだろう。」(p.28)

バックのこの著作は、晏陽初の思想と活動について、晏自身の肉声を伝えているという点で、晏が世を去った現在においては、きわめて貴重な資料である。興味深いエピソードが、随所に見られる。例えば、平教会を率いて全国の識字運動を指導していた1928年に、平教会のメンバー全員が逮捕されるという事件が発生した。当時の中国は、軍閥割拠の時代であり、各軍閥指導者は、晏の運動に注目し、その運動を自らの勢力圏内に取込み利用しようとしていた。当時の北京で支配的な地位にあったある軍閥から、資金提供の見返りに軍閥への協力を要請され、それを晏が婉曲に断ると、結果は一斉逮捕となった。晏自身は、地方に出張していて難をまぬがれた。北京にもどり、必死の奔走の結果、やっと2日後に全員が解放された。(p.32-33)

激動期にあった中華民国時代の中国にあっては、政治的な対立は凄まじく、晏の運動もその域外にとどまることは難しかった。晏は、運動を進めるに当たって、できるだけ政治には距離を置く姿勢を保っていた。しかし、定県実験の際には、積極的に定県の県政改革に携わるなど、徐々に政治の分野にも進出するようになる。しかし、その場合にも、自らの運動の独自性を失わないよう気を配っていたことが伺われる。「政府からの補助金は運動の助けになるが、あまりにも多くを受取り、プログラム全体をコントロールされるようなことがあってはならない」(p.68)

(2) 郷村工作討論会

1930年代の中国においては、多数の知識人が農村問題に取組んでおり、農民教育、農村建設の高揚が見られた。晏陽初は、平教会の指導者として定県で活動するばかりでなく、当時の中国の農村復興運動全体のリーダーの位置にあった。

当時、農村建設に参加した人々は、「郷村工作討論会」を組織して経験を交流し、活動の方法を研究した。この「郷村工作討論会」の討議の様相を収録したのが次の資料である。

* 章元善、許仕廉編『郷村建設実験』第1集 上海 中華書局 1934

<611.15-G64g>

* 章元善、許仕廉編『郷村建設実験』第2集 上海 中華書局 1935

<611.15-G64g>

* 江問漁、梁漱溟編『郷村建設実験』第3集 上海 中華書局 1937

<611.15-G64g>

第1回は、1933年7月に山東省鄒平の山東鄉村建設研究院で開催された。大会主席は、同研究院を主催する梁漱溟が務め、39の組織から63人が参加した。

第2回は、1934年10月に定県の平教会で開催され、晏陽初が主席を務めた。70の組織から150人が参加した。

第3回は、1935年10月に江蘇省無錫の江蘇省立教育学院で開催された。大会主席は、同学院の高陞四が務め、109の組織から、171人が参加した。

「鄉村工作討論会」に参集した組織は、平教会のような民間組織、大学、各種研究所などであり、当時の国民政府、省政府・県政府も代表を派遣していた。討論会の規模は、一回ごとに大きくなっている。

当時の晏の影響は、定県に止まらず、全中国に及んでいた。1930年代において、平教会は農村復興運動の推進役を担っていたのである。定県実験に関する研究を進めるに当たっては、当時のその他の地域の運動も視野に入れる必要がある。この『鄉村建設実験』という資料は、平教会ばかりでなく、当時の様々な組織の農民教育・農村建設の試みを現在に伝える点で貴重な資料といえよう。

(3) 雑誌『民間』

晏陽初の定県実験に関しては、その内容を知るうえで欠かせない資料がある。すなわち、平教会が出版していた半月間の雑誌『民間』である。

*『民間』第1巻第1期～第3巻第24期
1934.5～1937.4 <Z052.3-M1>

試みに創刊号を開いてみると、「発刊のことは」は、『民間』創刊の目的として次の4点をあげている。①各地の農村の実情の把握、②各地の農村運動家の経験の交流、③各地の農村運動の相互批判、外部からの意見の受容、④各地の農村運動家による民族の前途に関する意見の表明。この4番目にあげられている目的には、後述するような当時の多くの知識人を農村運動に駆り立てた危機感が垣間見える。

また、創刊号には、次のような論文が掲載されている。

孫伏園「全国各地の実験運動」
瞿菊農「力量の養成」
李景漢「定県農村経済の現状」
彭一湖「生産建設と条件建設」
熊西西「桑おばさん」(小説)

孫伏園論文は、当時の高揚する農村運動を、太平天国、戊戌新政、辛亥革命、五四新文化運動、北伐・国民革命に次ぐ、近代中国における第6番目の国家的大運動と位置付け、晏の定県での活動と共に、江寧、蘭谿、鄒平といった場所で展開されていた農村建設の運動を紹介している。そして、この運動の国家民族の前途に対する意義を説いている。

瞿菊農論文は、現時点の中国において最も重要なことは、中国社会の力量の造成であると説く。この力量は、組織から生まれ、また強靱な社会組織は教育によって実現されると説く。晏を含めて、当時中国において活動していた農村運動家は、中国の現状と将来に対する強烈的な危機感を有していた。当時の中国は、内部においては国共内戦など政治的・軍事的

激動が続き、外部からは日本軍の圧力を受けていた。この内憂外患こそが彼等を農村運動に駆り立てたのである。

李景漢論文は、定県の経済社会の概況を伝えている。李景漢は、平教会の一員であり、社会学者として、定県において中国初の本格的な社会調査を行い、その成果が多数残されている。

彭一湖論文は、当時の国民政府の経済政策について論じており、政府は社会的生産のための条件作りに全力をあげるべきことを説いている。

熊仏西の小説「桑おばさん」は、倦まずたゆまず働き続ける女性の姿を描いており、やや教訓的なおおいのする作品である。熊仏西は、平教会において文芸部門を担当し、農民のための戯曲などを創作している。

『民間』各号には、「農運情報」欄が設けられており、当時の定県を始めとする各地の運動の様子が把握できる。例えば、創刊号においては、晏陽初が1934年4月にフィリピンを訪問し農村運動の現状と意義について講演し、熱烈な歓迎を受けたとの記事がある。晏陽初とフィリピンとの関わりは、早くも1930年代から始まっていたことが分かる。

雑誌『民間』は、晏陽初と定県実験を研究するうえでの基礎資料である。

5. おわりに

晏陽初は、近代中国、アジアときわめて深くかかわった人物である。晏は、五四以後の平民教育運動、中国農村、内戦期米中関係、フィリピン農村、より広い第三世界の農村に関わり続けてきた。

晏がこのような活動を行った背景に

は、経済的に遅れた中国農村が存在し、教育から疎外された中国農民が存在するという、近代中国の客観的条件がある。また、フィリピンで晏の活動が定着したのも、アジア、第三世界の農村が多くの問題をかかえているからに他ならない。晏陽初研究に価値があると思われるのは、その活動が、近代中国、アジアの諸問題と密接に繋がっているからである。そのような視点から晏の活動を見ることが、重要であると思われる。

そのような視点のもとに、晏についての個別・具体的な研究を進めることが必要であろう。例えば、晏の初期の活動基盤となった中国 YMCA 組織、定県実験の詳細な検討、国民政府の諸政策とのかわり、内戦期米中関係に晏が果たした役割、フィリピンでの活動の分析などである。晏を、教育史のなかでのみ見たり、定県実験しか研究の対象にしないとすれば、晏の全体像は明確にならないであろう。なお、その個別的研究の際には、同時期の教育者である陶行知、梁漱溟の展開した運動との比較や、中国共産党の指導した農村革命との比較という作業も重要であろう。

以上のように、晏陽初の歩みは、中国の問題に止まらず、現代世界が直面する諸問題と関連している。晏陽初個人の経歴の特殊さ、提起した問題の大きさからして、更なる研究に値する人物のように思われる。

(かまた・ふみひこ 参考課)